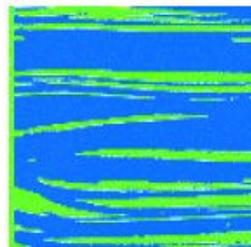


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2013年 夏号 No.71 (2013年8月25日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山繁樹
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第31回年次大会を開催して.....	平澤 紀子
日本行動分析学会第32回年次大会のご挨拶.....	平岡 恭一
日本行動分析学会創立三十年記念シンポジウムを終えて.....	井垣 竹晴
年次総会と功労者表彰のご報告.....	理事長 園山 繁樹
機関紙編集委員会からの重要なお知らせ.....	機関誌編集委員会
自著を語る:『応用行動分析学第2版』.....	中野 良顯
連載:いま、こんな研究会しています(7)「実験的行動分析京都セミナー」の紹介.....	伊藤 正人
ABAI 2013 体験記(1):「私のABAI 体験記:SQAB も忘れずに・・・」.....	藤巻 峻
ABAI 2013 体験記(2):「2013年ABAI 体験記」.....	腰塚 由子
英文抄録作成支援ボランティアの紹介について.....	機関誌編集委員会
「行動分析学 冬の学校」の開催見送りについて.....	研究教育推進委員会
編集後記.....	ニューズレター編集部

日本行動分析学会第31回年次大会を開催して

第31回年次大会準備委員長 平澤 紀子(岐阜大学)

2013年7月27日・28日に、岐阜大学において第31回年次大会を開催しました。大会参加者は451名でした。不便な場所にもかかわらず、多くの方にご参加いただき、活発な討議、交流をしていただきましたことに、心よりお礼を申し上げます。これはひとえに、

三十年記念式典・シンポジウムに後続する大会であり、そして学会や会員の皆様のお力添えにより充実したプログラムとなりましたおかげです。なにかとご不便やご迷惑をおかけしたと思いますが、無事終了できましたことに、あらためて感謝申し上げます。

さて、今回は舞台裏をお話ししましょう。事の始まりは、年次大会支援委員長の中島定彦先生からのお電話でした。岐阜大学では毎年、行動分析学の講座を開催し、学会に後援をいただいております。そのことと思いつつ、気楽に話していると、「・・・年次大会?」。年次大会といえば、行動分析学の本家や少なくとも複数会員のいる大学でしょう。私は、理事長の園山先生が西南女学院大学で大会委員長をされたときのスタッフでしたが、その時には4名の教員が会員でした。「まさか会員1名の大学で?・・・」。よくよくお聞きすると、行動分析学が拡大している今日、より多くの大学で開催できるように、年次大会支援委員会ができて、全面的にバックアップするというこのようです。中島先生のご説明があまりに上手でした。それに、本学のような条件で年次大会が開催できるとなれば、どこの大学でもできます。「では、誠に至りませんが・・・」というわけです。そんなこんなで、同僚の協力もとりつけ、いよいよ準備が始まりました。

とはいえ、当初は「どうなることやら」です。それが、「なんとかなるかも」に変わるのに時間はかかりませんでした。不慣れな者が大会運営をする時に、最も困るのは、誰に何を相談し、どのように事を進めていけばよいのかです。へたをすると船頭多く・・・になってしまいます。本大会では、支援委員長がすべての窓口となり、引き継ぎ事項はもとより、いつまでに何をすればよいか、逐一ガイドしてくださいました。特に、その時々開催校の判断では、一貫性が難しいこともあります。その点も安心です。それも、支援委員長にメールすると、即時に的確なお答えをくださいます。よって、相談行動は強化され、メールのやりとりは膨大なものになりました。この点はご容赦いただきとして、「支援委員会があれば、いろいろ相談しながら、開催校の状況を踏まえた大会運営ができます。」と明言しておきたいと思えます。

加えて、あらゆる面で学会や会員の皆様から、ご高配をいただきました。大会まではもちろんのこと、当日も、スタッフに暖かいお言葉をかけてくださったり、

会議のお弁当を片づけてくださったり、会場アナウンスを手伝ってくださったりで、スタッフが感激していました。また、大会終了後の鶴岡いッツアーでは、私の方が慰労していただいたような具合です。行動分析学の発展に向けて、皆で成功させようとする、こうした文化が若い会員が多いことにつながっているのだと思います。このようなシステムやご配慮があると、今後、どこでも年次大会を開催でき、その喜びを味わえるものと思います。

もうひとつ、お話しします。今回、三十年記念に後続する大会でしたので、どんな工夫をしたらよいかと思案しておりました。それを助けてくださったのは、三十年記念グッズ担当の杉山尚子先生です。おかげで、三十年記念Tシャツ岐阜大バージョンで、皆様をお迎えできました。会期中ずっと、売り子をしている杉山先生の姿を見られたでしょう。オリジナルグッズは、前年度の高知大会から構想されており、本大会に至るまでに多大な準備をされたものです。大会初日は誰よりも早く会場で準備をされ、大会終了後の月曜も岐阜大学で片づけをされていたことはスタッフしか知りません。

懇親会においても、記念のワイングラスで乾杯できました。あのグラスは業者にしかおろさないものを特別にご手配いただいたものです。また、瀬島先生のマジックショーにおどろかれました。瀬島先生は心理学者として、そして世界的なマジシャンとして、ご活躍されている会員です。今回、杉山先生のご紹介により、ご多忙中、ご来訪いただけた次第です。本学のスタッフ以上に、フル回転された杉山先生、ありがとうございました。

最後に、功労賞の先生のお言葉から、行動分析学のこれまでをふりかえり、会員の皆様の発表や討議のおかげで、本大会を未来へつなぐ場としていただけたと思います。岐阜の地で、このような大会をさせていただきましたことに、今あらためて喜びと幸せを感じております。スタッフを代表して、ありがとうございました。

日本行動分析学会第32回年次大会のご挨拶

第32回年次大会準備委員長 平岡 恭一（弘前大学）

このたび、日本行動分析学会第32回年次大会を、青森県弘前市にて2014年6月28日（土）、29日（日）に開催させていただくことになりました。この時期、一応梅雨には入っていると思いますが、北東北の梅雨はまだピークを迎えておらず、比較的さわやかな気候ではないかと予想されます。弘前では年間を通じて大きなお祭り・行事が四つ開催されますが、6月は5月はじめのさくらまつりと8月のねぷたまつりのちょうど中間に当たります。観光という面では少々物足りないかもしれませんが、その分宿泊施設などは、余裕

があろうかと存じます。青森県にはまだまだ行動分析が行き渡っておらず、また準備体制も小さな組織ですので、何かと至らないことが多いと存じますが、年次大会支援委員会のご支援をいただきながら、精一杯準備をさせていただくつもりです。年次大会が東北地方で開催されるのは初めてと聞いております。たくさんの方の皆様の参加をこころよりお待ちしております。みんな、弘前さ来いへじゃ。待ってるはんで。

日本行動分析学会創立三十年記念シンポジウムを終えて

井垣 竹晴（流通経済大学）

日本行動分析学会創立三十年記念事業のひとつである記念シンポジウムが、去る7月26日（金）に名古屋市中区のテレピアホールで開催されました。7月末の平日の開催ということで、多くの大学では授業や試験期間と重なっており、来場者数が少なくなるのではと懸念されたのですが、幸いにも169名（うち行動分析学会会員111名、非会員58名）の方々にご来場いただき、盛況のうちにシンポジウムを終えることができました。

本シンポジウムですが、創立三十年記念事業の下位委員会である「記念シンポジウム・特集号委員会」によって運営されました。私は、当委員会委員長の務めさせていただきました。当初依頼があったとき、私のような若輩者がこのような大役を務められるのか甚だ不安ではありましたが、経験豊かな委員の先生方のご協力によって、まずは記念シンポジウムを無事

終えることができました。下位委員会のメンバーは私の他に、井澤信三先生（兵庫教育大学）、石井拓先生（徳山大学）、長谷川芳典先生（岡山大学）、藤健一先生（立命館大学）、眞邊一近先生（日本大学）、吉岡昌子先生（愛知大学）です。また記念シンポジウム当日は愛知大学心理学コースの学生の皆様にも多大なるご協力をいただきました。他にも創立三十年記念事業実行委員会事務局の先生方にも様々なご助言をいただきました。ご協力いただいた方々に、この場を借りて感謝の意を表させていただきます。

シンポジウムでは、開かれた行動分析学であるために何が必要かという問いのもと、テーマとして「開かれた行動分析学に向けて—シングルケースデザインをめぐって—」を掲げました。シンポジウムでは、前半と後半の部を通じて、話題提供者4名、指定討論者2名の先生方にお話しいただき、時間も14:00～19:00

まで計5時間にわたる大規模なシンポジウムとなりました。

前半の部は、私の趣旨説明の後、石井拓先生（徳山大学）により「シングルケースデザインの概要」というタイトルでお話いただきました。ここでは様々な実験デザインについて紹介いただいた後、シングルケースデザインの内的妥当性と外的妥当性を高めるための諸条件について概説いただきました。その後、吉岡昌子先生（愛知大学）・藤原誉久先生（上川病院）・乾明紀先生（京都光華女子大学）の3名によって「実践場面におけるシングルケースデザインの活用」というタイトルで話題提供をいただきました。吉岡先生のコーディネートのもと、乾先生により組織開発におけるシングルケースデザイン導入の可能性を、藤原先生には認知症ケアにおけるシングルケースデザインの活用事例を紹介していただきました。

後半の部では、「シングルケースデザインにおける統計分析」というタイトルで山田剛史先生（岡山大学）に話題提供いただきました。記述統計的手法として効果量を、推測統計的手法としてランダムマイゼーション検定について主にご解説いただきました。次に田垣正晋先生（大阪府立大学）に「シングルケースデザインと質的研究」というタイトルで話題提供いただきました。個を重視する点で行動分析学とも共通項を持つと考えられる質的研究と行動分析学との関係性について論じていただきました。その後、行動分析学の内外から1名ずつの先生方に指定討論いただきました。行動分析学の内部からは、藤健一先生（立命館大学）に、外部からは吉田寿夫先生（関西学院大学）に指定討論いただき、シングルケースデザインの現状と展望について貴重なご意見をいただきました。その後、フロアの方々と先生方との間で活発な意見交換がなされま

した。

本シンポジウムでは、行動分析学の特色のひとつであるシングルケースデザインという研究方法をもとに行動分析学が今後取り組んでいくべき多くの課題が提示されたと思います。10年後の創立40年においてもおそらく記念事業があるでしょう。その時に、この10年を振り返ってみて、進歩があったと胸を張って言えるような10年間にできればと思います。本シンポジウムでの発表や議論が、今後、皆さんがシングルケースデザインについて考えていくひとつのきっかけになれば幸いです。

最後にひとつ苦勞話になりますが、下位委員会が組織されてから記念シンポジウム実施まで1年数か月にはわたり委員の皆さんとは連絡を取り合って相談してきました。メンバーは日本全国各地に居を構えているため、直接集まっただけの議論が難しく、主にメールでの議論となりました。しかしメールでは議論が思うように進展せず、その点苦勞しました。そのため直接集まっただけの打ち合わせも何度か設けたのですが、やはり多くの重要な事柄はその時に決まりました。直接の会合は、高知（30回年次大会）、京都（立命館大学）、愛知（愛知大学）で行い、会合後は当然のことながらお酒を交えての歓談で締めくくりました。メールなど電子通信手段を通しての意見交換も便利ですが、実際に対面で話し合うことの重要性を痛感しました。

なお本シンポジウムの内容ですが、「行動分析学研究」の特集号においてまとめられる予定です。刊行は2014年度を予定しています。特集号では、本シンポジウムの記録だけでなく、それ以外にもいくつか企画を考えています。またシンポジウムの質疑応答では十分に議論できなかった問いについても紙面上で回答がされる予定です。ご期待ください。

年次総会と功労者表彰のご報告

理事長 園山 繁樹

過日、岐阜大学で開催されました第31回年次大会の第1日目に年次総会、並びに、功労者表彰式を執り行いましたので、会員の皆様にご報告いたします。

年次総会におきましては、今年度の主な事業として以下のことが承認されました。

①「行動分析学研究」の刊行（第28巻第1号(7月)、

2号(2月))

- ②ニューズレターの刊行 (No.70 春号～No.73 冬号)
- ③第31回年次大会の開催 (岐阜大学: 7月27日～28日)
- ④年次総会の開催 (第31回年次大会第1日目)
- ⑤功労者表彰の実施 (第31回年次大会第1日目)
- ⑥自主公開講座の助成
- ⑦日本在住学生会員の ABAI/SQAB、ABAI 国際会議参加に対する助成
- ⑧行動分析学に関する研究会を開催するための助成
- ⑨学会企画出版「行動分析学による問題解決(仮)」の準備開始
- ⑩創立三十年記念事業の実施
 - i) 記念セレモニー、記念シンポジウム (テレビアホール: 7月26日)
 - ii) 記念グッズの作成・販売 (Tシャツ、ワイングラス、USBメモリ)
 - iii) 「行動分析学研究」特集号(記念シンポジウム等)の発行
- ⑪学会資格に関する検討特別委員会(仮)の設置(期限付き)
- ⑫体罰に関する学会声明タスクフォースの設置

すでに、第31回年次大会、創立三十年記念事業の記念セレモニー・記念シンポジウム、記念グッズの販売等は実施され、他の定例の事業についても順調に実施されています。その他、各委員会の担当事業についても詳細が報告され、原案通り承認されました。

上記⑪「学会資格に関する検討特別委員会(仮)の設置(期限付き)」については、国家資格としての心理師(仮称)に関する日本心理学諸学会連合等による検討・準備が進む中、本学会としての専門性を担保するための学会資格の必要性について、国内国外の関連情報の収集・整理、必要性の有無の検討等をしていただくものです。設置期間は今期の理事会任期(2015年3月末)までを一応の目処としています。委員長他メンバーはこれから常任理事会で決定する予定です。

上記⑫「体罰に関する学会声明タスクフォースの設置」については、昨今の体罰報道に見られるように、教育・福祉現場やスポーツにおける体罰の多さ、また体罰を容認する指導者の多さが問題となっており、本学会としては学会の社会的活動の1つとして、行動分析学の研究知見を踏まえた体罰反対の声明を出す必

要性が常任理事会・理事会で検討され、年次総会で提案した次第です。委員長は島宗理常任理事、副委員長は吉野俊彦理事です。委員についてはこれから委嘱しますが、最終的には常任理事会・理事会においてできるだけ早く声明をまとめ、発表する予定でいます。

現在、本学会員は960名余りとなり、もうすぐ千人を超える大きな学会になります。それに併行して本学会の社会的責任も大きくなって来ますので、常任理事会・理事会でもこの点を十分に協議していきたいと思

さて、年次総会に先立って、本学会では初めての功労者表彰式を執り行いました。間もなく千人を超える学会に発展したのも、三十年前に基礎領域と応用領域で力を合わせて本学会を組織された先達のご努力があつてのことであり、また本学会の運営に尽力していただいた先輩たちのご貢献があつてのことです。常任理事会・理事会では創立三十年を迎えたこの機会に、今年度末までに70歳以上になられる会員、並びに会員以外の方の中から、本学会の運営、並びにわが国における行動分析学の発展に顕著な功労のあつた方として、以下の10名の先生方を表彰することといたしました。

表彰者(順不同): 山口薫先生、片岡義信先生、小林重雄先生、河嶋孝先生、氏森英亜先生、中野良顯先生、藤田継道先生、浅野俊夫先生、佐藤方哉先生(代理: 杉山尚子先生)、富安ステファニー先生

当日は6名の先生方にご出席いただき、表彰状と記念品を差し上げることができました。表彰式の後には、受賞者を代表して、本学会初代会長の山口薫先生からご挨拶を賜りました。山口先生は車椅子を利用して奥様と一緒に表彰式に駆けつけてくださり、あとに続く私たちに大きな激励をいただきました。式に臨みました会員一同、先輩方の足跡を再確認するとともに、さらなる発展のために意を新たにいたしました。

写真は表彰式後の記念写真です(撮影は真邊一近常任理事)。受賞された先生方の益々のご健勝をお祈りするとともに、私たちが研究・実践に一層の努力をして参りたいと存じます。



後列左から：藤田先生、浅野先生、杉山先生（佐藤先生代理）

前列左から：中野先生、山口先生、河嶋先生

機関誌編集委員会からの重要なお知らせ

機関誌編集委員会

会員の皆様、機関誌編集委員長の森山哲美です。

先日、岐阜大学で行われた日本行動分析学会第31回年次大会の総会で、機関誌編集委員会から提案された下記の事項が承認されましたのでお知らせいたします。

機関誌『行動分析学研究』の

1. 論文種別の変更
2. 図表のタイトルとキャプションの英語表記原則化

機関誌編集委員会は、行動分析学の研究の活性化と、査読における評価基準の明確化を目的として、機関誌『行動分析学研究』の論文種別を、現行の「原著」、

「実践研究」、「短報」、「テクニカルノート」、「展望」、「討論」、「解説」、「研究報告」を改め、新規に「(原著)論文」、「研究報告」、「実践報告」、「テクニカルノート」、「展望」、「討論」、「解説」に変更します。下線の種別が変更されました。「研究報告」について、種別名称の変更はありませんが、内容さらに規程ページ数が変更されました。他に、図表のタイトルとキャプションは、原則、英語表記となりました。詳細は、「新投稿規定」ならびに「新執筆の手びき」を参照してください。

上記の変更は総会が行われた2013年7月27日から有効となります。これから論文を執筆投稿なさろうとしておられる方は、「新投稿規定」ならびに「新執筆

の手びき」を参照してご投稿ください。いずれも学会ホームページから見ることができます。

なお、すでに執筆しておられる方、投稿していた方、査読を受けておられる方の論文については、旧規定で対応させていただきます。しかし、旧規定での対応は2014年3月31日までといたします。

ご不明な点があれば、編集委員会事務局宛て(下記)にお尋ねいただきますようお願いいたします。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19

国際文献社内『行動分析学研究』編集事務局 宛

電子メール: jjba-edit@bunken.co.jp

Tel : 03-5389-6492 Fax : 03-3368-2830

機関誌編集委員会委員長

森山 哲美

<自著を語る>

クーパー、ヘロン、ヒュワード著／中野良顯訳

『応用行動分析学第2版』

中野 良顯 (日本行動分析学会理事、教育臨床研究機構理事長)

『応用行動分析学第2版』(Cooper, J. O., Heron, T. E., & Heward, W. L. *Applied behavior analysis*, 2nd ed., 2007) を翻訳しました。

原著は770頁、重さ1.9 kg、定価153ドル。翻訳書は1,269頁、重さ2.3 kg、18,000円(約180ドル)。非常に大部で、非常に高価な書物です。

原著第1版は1987年に、第2版は20年後の2007年に出版されました。この第2版が出版されるまでに、行動分析学の概念分野、基礎分野、応用分野において、多くの重要な論文や著作が発表されましたが、第2版にはそれらの主要な文献1000篇が収録され、内容が一一新されています。

応用行動分析学は、行動原理から導出された戦術を、社会的に重要な行動の改善のために組織的に応用し、実験を通じて行動の改善に影響した変数を同定する科学です。本書はこの応用行動分析学を、正確に、総合的に、かつ最新の成果を盛り込んで、現代的に説明することを目指して執筆されています。

科学の記述においては、標準的な一連の専門用語が必要になりますが、本書では応用行動分析学の基本用語が概念的に系統立てて、一貫した用法によって定義

されて、使用されています。それらの基本用語約400語は「用語集」として巻末に掲載されています。

また本書にはこの分野の基本文献1400点以上が一次資料として引用されています。こうした大量の引用は、読者をそれらの基本文献に親しませ、その意義を正しく評価できるようにするためです。例えば、スキナーの『有機体の行動』(1938)と、それに掲載された歴史的に重要な実験の最初のデータも、ベア、ウォルフ、リスレー(1968)の応用行動分析学の特徴を宣言した概念的に重要な著作の大要も収録されています。

さらに本書には100点以上の実際の研究データのグラフが収録されています。応用行動分析学の原理と手続きを実際のデータによって説明する、重要な問題を解決し関数関係を証明するために必要な正確さと行動制御の程度をグラフによって例示する、グラフとその説明を読んで原典にさかのぼり研究の全容を正確に理解し評価できるようにする、そしてグラフについて多角的に討論して視覚分析能力(実験条件内と条件間の変動性・水準・トレンドを目視検査して理解し解釈するスキル)を向上させる機会を与えるためです。

また第2版には、旧版にはなかった新しい5つの章が登場しました。「負の強化」(12章、イワタとスミス)、「動機づけ操作」(16章、マイケル)、「行動機能査定」(24章、ニーフとピーターソン)、「言語行動」(25章、サンドバーグ)、「倫理」(29章、マルティネス-ディアスら)です。これらは応用行動分析学の最近の発展を牽引した当時者によって執筆されています。

そのうえ本書には、付録として「行動分析士資格認定協会第4版課題リスト」(2012)が収録されています。このリストは、全ての行動分析士が習得すべき最小限の知識と能力を網羅するものです。すなわち、行動分析士に求められるのは、行動分析学の基礎知識(行動分析学の哲学的前提、基本用語の定義、言語オペラントと非言語オペラントの区別、測定概念)を学び、基本的スキル(測定、実験デザイン、行動変化についての考慮、行動改善の基本成分、特別な行動改善手続、行動改善システム)を身に付け、専門家としての責任(問題の同定、測定、査定、介入、実行・運営・スーパービジョン)を果たすことです。そのためには、一定数のインストラクションを受講し、最低時間数のスーパービジョンつき実習を経験し、その上で認定協会の資格試験を受けて合格しなければなりません。それと合わせて、いろいろな人々と協力して問題解決に取り組み、その解決過程で応用行動分析学の倫理を習得する必要があります。

本書は全29章、13部から構成されています。第1部の2つの章では、あらゆる科学的営みの基礎となる教義を説明し、行動を理解するための自然科学的アプローチとしての行動分析学の歴史の概要を述べ、この科学の基本原則と概念を説明しています。

第2部では、対象となる行動をどう選択し、定義し、測定するかに関して、考慮すべき事項と基準と手続が論じられています。

第3部の5つの章では、行動と環境の関係を実験的に分析するための戦術と、行動分析を設計し、再現して、評価するための基本問題が検討されています。

第4部から第8部までは、行動の主要原理(例えば、強化、弱化、消去)と、それらから派生する手続(例えば、シェーピング、連鎖化)が取り扱われています。すなわち、既存行動の頻度を増加させ、望ましい刺激性制御パターンを獲得させ、新しい行動を形成し、非

罰の手続によって行動の頻度を減少させるなどの手続です。

第9部では、行動機能査定が詳述されています。行動機能査定は、問題行動が当人にとってどのように役立っているかを、つまりどんな機能を果たしているかを明らかにする精巧な方法です。機能査定によって得られた情報は、それと同じ機能を果たす代替適応行動と置換する処遇を設計するために役立ちます。

第10部では、B. F. スキナーの言語行動の分析の概要と、それがことばのない子のことばの指導に対してもつ意義と実際の応用の仕方が提示されています。

第11部の2つの章では、行動改善テクノロジーの特別な応用、すなわち随伴性契約、トークンエコノミー、集団随伴性、自己管理の4つの応用が詳述されています。

第12部では、行動分析家による介入が激性の所産をもたらすように、すなわち時間を超えて維持され、訓練以外の場面においても生起し、他の有用な行動に波及するようにプログラミングするための戦略と戦術の概要が提示されています。

そして最後の第13部では、応用行動分析家の倫理について考察し、望ましい実践の在り方が提示されています。

* * *

本書を訳し終えるまでに6年を要しました。「国際行動分析学会2013年ミネアポリス大会には必ず持参する!」。前年のシアトル大会で3人の著者にそう約束していました。

そしてミネアポリス大会前日の5月23日夕、外神田の明石書店に駆けつけて、出来立ての5冊を受け取ることができました。翌日、5冊をリュックに詰めて、成田からミネアポリスに飛びました。ホテルに着くと、すぐビルの部屋を訪ねて、3冊を手渡しました。

またABAエキスポに展示するため、杉山尚子先生にも1冊お渡しして、先生を経由して日本行動分析学会に献上させていただきました。

学会で祝杯を挙げた後、コロンバス郊外のワーキングトンに戻ったビルは、6月1日付で次のような喜びのメールと写真を送ってきました。

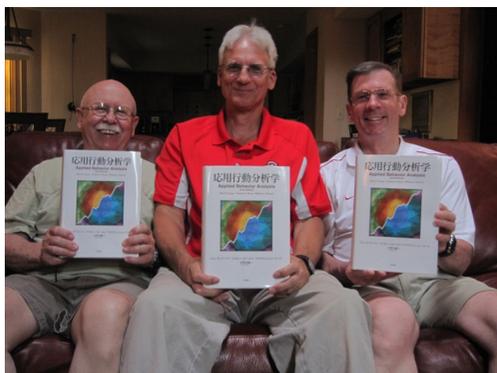
Dear Yosh,

Last night we enjoyed holding the Nakano White Book together for the first time. After that, Bill read a few pages to Coop and Tim. (See attached photos.) And after that, we enjoyed some Japanese single malt whiskey!

As we wrote in our preface, you tackled the arduous task of translating this book with tremendous personal commitment and unparalleled professional dedication. If Japanese students apply the same work ethic and commitment to excellence in studying Applied Behavior Analysis that you brought to its translation, there will be a great infusion of behavior analysis talent in Nippon!

Sincerely,

Coop, Tim, & Bill



日本版を手にするクーパー、ヒューワード、ヘロン
(左から)

写真にある通り、本書のブックデザインは白を基調としており、そのため米国ではビートルズの『ホワイトアルバム』になぞらえて『ホワイトブック』と呼ばれています。日本版でも原著のブックデザインを採用して『ホワイトブック』としました。中国版と韓国版でも同様のデザインが使用されています。

本書は独立科学としての応用行動分析学の父、ドナルド・マール・ベアに捧げられています。本書のまえがきには、ベアの教え子のイレヌス・シュワルツがこう書いています。「私は学生が教授とともにこの『ホワイトブック』第2版を熟読し、行動原理の定義と例と応用について討論している姿を想像する。この第2版は、認定行動分析士の資格を取る準備をしているす

べての学生が到達すべきスタンダードになるだろう」と。

本書を完成させるまでに、初校、再校、念校と、校正刷りを3回、合せて約3900頁読みました。それでも誤りを訂正しきることはできませんでした。例えば、x v 頁の「テキストの編成と構造」の部分では最初の文章、「第1部の2つの章は、あらゆる科学的営みの基礎となる教義を説明し、行動を理解するための自然科学的アプローチとしての行動分析学の歴史の概要を述べ、この科学の基本原則と概念を説明している。」が脱落していることが判明しました。

また翻訳している間に原著にも誤りがあることを発見しました。例えば、タクト拡張の1つである *solecistic extension* が、原著537頁では *solistic extension* になっています。校了直前にスキナー (1957) を参照して、日本版では「破格的拡張」 (*solecistic extension*) を採る決断をしました。ミネアポリス大会でサンドバーグに会って確認すると、「お前が正しい、アメリカ版も修正しなければ」と笑っていました。また原著の参考文献には、次の論文が欠落していることも分かりました。さらに人名索引にも同様の欠落が見つかりましたので、日本版ではどちらも修正しました。

James, J. E. (1981). Behavioral self-control of stuttering using time-out from speaking. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 14, 25-37.

Pierrel, R., & Sherman, J. G. (1963). Bamabus, the rat with college training. *The Brown Alumni Monthly* (Feb.), Brown University.

Tawney, J. W., & Gast, D. L. (1984). *Single subject research in special education*. C. E. Merrill Publishing Company.

Sisson, L. A., & Barrett, R. P. (1984). An alternating treatments comparison of oral and total communication training with minimally verbal, mentally retarded children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 17, 559-566.

「本作りはネバー・エンディング・ストーリーだなあ!」。ビルのことばです。日本版の誤記や脱落も、今後ぜひ修正してゆきたいと思っています。

本書の出版にあたりましては、高久国際奨学財団 (高久眞佐子理事長) から出版助成 (100万円) をい

ただきました。本書の予価は28,000円でしたが、出版助成をいただいたおかげで、18,000円に引き下げることができました。それでも大変高価ではありますが、原著が153ドルであることを考えますと、やむを得ないと思っております。1人でも多くの方々にお読みいただいて、日本における社会正義の実現のために活用していただきたいと、心から願っております。

この本を日本行動分析学会創立30年記念の年に出版できたことは、学会功労賞の受賞と合わせてまことに感慨無量であり、深い喜びであります。

(編集部より) 中野先生が主催されている「教育臨床研究会」では、9月例会より、この本を1章ずつ読み合わせて行き、各章に関連した資料も読み込んでいられるそうです。この研究会は開かれた研究会であり、誰でも参加できますが、仲間としてともに学ぶ意欲があり、継続して参加できる方が優先されます。研究会のURLは、以下になります。<http://www.n-kids.net/>

<連載：いま、こんな研究会しています(7)>

「実験的行動分析京都セミナー」の紹介

伊藤 正人(大阪市立大学)

行動の実験的研究を行うには、走路や実験箱などの行動を測定するための実験空間、強化子呈示のための自動給餌器、行動の記録のための測定機器などの道具(instrument)が必要になる。これらの道具は、一般に実験装置と総称されるが、これらの道具を研究目的により、適切に組み合わせることで、刺激の呈示から行動の測定までを組織化することができる。これを道具使用の組織化、またはインスツルメンテーション(instrumentation)という。これは、一組の実験システムを構築することである。この実験システムを構成する道具は、実験遂行のための単なる手段ではなく、行動の捉え方、いうなれば、行動研究の“思想”を表しているのである。例えば、オペラント条件づけ研究で用いられる実験箱は、行動を空間的移動としてではなく、時間軸上で起きる出来事として捉える見方を具現化したものといえる。

このように、行動研究のための道具の開発や使用は、行動研究の“思想”と不即不離な関係にあり、道具の開発や使用の歴史を辿ることから、研究の背後にある“思想”や研究の変遷を明らかにすることができる。このような観点から、オペラント条件づけ研究の進展を回顧し、新たな研究への展望を意図して、本セミナーを開催することにしたのである。今回のセミナーで

は、「オペラント条件づけ研究のインスツルメンテーション：回顧と展望」と題した6回シリーズを企画したが、今後は、別のテーマのセミナーも考えていく予定である。

以下に本セミナーの概要を掲げておこう。現時点(2013年8月)では、第1回と第2回が終了(これまでの研究会の開催報告は、学会ホームページで見ることができる)し、本年度は、第3回と第4回のセミナーが、来年度には、さらに2回のセミナーの開催が予定されている。なお、セミナーを11月下旬と3月下旬に開催することにしたのは、セミナーの参加に合わせて京都の四季の移ろいをも楽しんでいただこうという意図を込めたのである。

第1回 行動パターンを記録する：累積記録器の誕生と発展(2012年12月1日(土))

ハーバード大スキナー研究室から慶応義塾大心理物理学研究室に送られた初期型累積記録器の実物動作展示

伊藤正人「セミナー企画趣意」

浅野俊夫「最初期累積記録器から米国ガーブランド社製累積記録器まで」

吉岡昌子「Skinnerが1930年代に作った下降式累積

記録器の動作模型]

藤 健一「Skinner および Gerbrands によって 1940 年代～1950 年代に試作された、いくつかの累積記録器とその動作模型の製作」

第2回 実験空間を構築する：実験箱（スキナー箱）の誕生と発展（2013年3月30日（土））

伊藤正人「自然空間から実験空間へ：行動研究の“思想”と生態学的妥当性」

吉岡昌子「自由反応場面の原点となった傾斜実験箱（Skinner, 1930）の動作模型」

浅野俊夫「ニホンザルの断続試行場面から自由反応場面への移行」

青山謙二郎「ラット用オペラント箱の装置と研究」

佐伯大輔「ハトの実験空間：個別実験から集団実験まで」

藤 健一「キンギョ（魚類）用実験箱」

第3回 強化子呈示を自動化する：給餌装置の開発（2013年11月30日（土））

第4回 変動性を実現する：強化スケジュール研究におけるタイマーとカウンター（2014年3月29日（土））

第5回 成人を対象とした実験のインスツルメンテーション（2014年11月下旬（予定））

第6回 子どもを対象とした実験のインスツルメンテーション（2015年3月下旬（予定））

<ABAI 2013 体験記（1）>

私の ABAI 体験記：SQAB も忘れずに・・・

藤巻 峻（慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻）

この度は第39回国際行動分析学会(ABAI)への参加にあたって、日本行動分析学会より「日本在住学生会員の ABAI/SQAB の参加に対する助成」を受けました。この場を借りて御礼申し上げます。今回は ABAI だけでなく、SQAB でもポスター発表を行いました。そのため「SQAB/ABAI 体験記」ということで、過去の体験記では触れられることがなかった SQAB での体験も合わせて記そうと思います。

早速ですが、SQAB とは ABAI に先立って行われる数量的行動分析学会(Society for the Quantitative Analyses of Behavior)の略称です。SQAB の特徴の1つは、毎年定められたテーマに沿って行われる口頭発表が多く、時間帯を占めていることです。今年は”Contextual Control” というテーマで15名弱のスピーカーによって次々と発表が行われました。

初日と2日目の夕方に行われる SQAB のポスター発表も、ABAI のそれとは少し雰囲気が違います。具体的には、発表は2日間にうまく分散されていて、なおかつ発表時間が約3時間と長いので、ひとつひとつ

の研究をじっくり見ることができます。また、SQAB 自体がホテルの Ballroom を貸しきって開催されるため、比較的近い距離感の中で発表が行われます。こうした”Contextual Control” がうまく機能しているためか、研究者同士の交流がしやすく、著名な先生とお話できる機会も豊富です。今回の発表内容は Resurgence についての研究でしたが、同じテーマで研究をしている大学院生と議論したり、Ralph R. Millar 先生から指摘を頂いたり、刺激的で濃密な時間を過ごすことができました。

このような貴重な経験をできる SQAB ですが、残念なことに今回日本人の参加者は私を含めてわずか3名程しかいなかったようです。年次ごとのテーマにもよりますが、これほど数量的行動分析の世界にどっぷりとつかれる機会は普段の研究生活の中でそう多くはないと思います。特に基礎研究に携わる方には ABAI だけではなく SQAB への参加もオススメです。

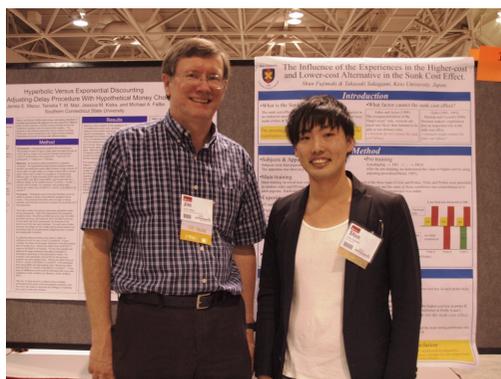
SQAB のプログラムが終わると同時に、ABAI のプログラムが始まることとなりますが、過去の体験記

にも書かれているように、ABAIでは非常に多くのプログラムが存在しています。同時時間帯に行きたいプログラムが重なっていることも少なくありません。参加する度に思うことですが、ABAIを攻略するコツは、事前にどの発表を聞きに行くかを綿密に決めておくことに尽きると思います。また、同僚や友達と一緒にいる場合には、協力して各自が別々の発表を聞きに行き、後でその内容をシェアするというのも1つの手だと感じました。

ABAIでは3日目にハトを用いたサンクコスト効果についての研究を発表しました。ABAIでの発表で特に印象深かったのは、偶然にも隣の発表者が、『メイザーの学習と行動』でおなじみのMazur先生だったということです。ちょうど人がいなくなったを見計らって声をかけたところ、“I remember you”と返してくれました。2年前、まだ学部生だった私が初めてABAIに参加した時、指導教授である坂上先生、Mazur先生と3人で昼食を共にする機会がありました。そんな些細な出来事をMazur先生が覚えていてくれたことには感慨深いものがありました。一緒に写真を撮ってもらい、Learning and Behavior (7th Edition)にサインをもらうという、なんともミーハーな行動をしたことも良き思い出です。

最後に、来年度以降のSQAB/ABAIへ参加される方へ。今回のSQAB/ABAIへの参加を通じて感じたことは、とにかく積極的に色んな人と交わってみることが

大事だということです。私を含め多くの学生会員は、英語だって流暢に話せるわけではないし、発表を聞きに行っても理解できないことだっていっぱいあると思います。しかしせっかくアメリカまで行くわけだし、失敗してもいいから色んな人と話してみるか、くらの気持ちでいた方が意外とうまくいくものなのかもしれません。私は初めての参加から3年目にしてやっとそんな当たり前のことを実行することができました。そして、過去3年間で最も充実した時間を過ごすことができました。まとまりのない文章になってしまいましたが、この体験記がこれから参加される方々の参考になれば幸いです。そして今回日本行動分析学会から助成を受けられたことについて重ね重ね御礼申し上げます。ありがとうございました。



<ABAI 2013 体験記 (2) >

2013年 ABAI 体験記

腰冢 由子 (駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻)

2013年5月24日から28日の5日間、アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリスで開催された第39回国際行動分析学会 (ABAI) に参加してきました。ずっと国際学会に行きたいと思いつつ、先伸ばしにしていたのですが、今回日本行動分析学会から「日本在住学生会員のABA/SQAB参加に対する助成」を受けることができ、5月27日に「Acquisition and extinction of timeout

avoidance behavior in humans」というタイトルで、初の海外での研究発表が叶いました。拙い体験レポートですが、今後国際学会で発表を考えている学生の方に対し、私の経験が少しでも参考になれば幸いです。

私自身なによりも「国際学会」という響きに緊張や不安を持っていましたが、学会参加後、一番に思ったことは「行って後悔無し」の一言に尽きます。準備に

ついては本当にギリギリで、余裕のない慌ただしい出国でした。意気込みは大切ですが、円滑な発表のための事前準備の大切さを改めて痛感し、そして反省しています。長時間飛行機に乗ることも英語圏に行くのも初体験だった自分には、ホテルへ辿りくまでの道のりすら大きな勉強でした。

日本を24日の朝に出発し、テキサス州のダラス/フォートワース国際空港経由で同24日にミネアポリス・セントポール国際空港に到着しました。空港から約30分でホテルに着き、大会受付を先に済ませようと学会会場となるコンベンションセンターまで歩き（今回の学会会場は徒歩数分圏内にホテルが沢山あったのです）、まずそこで一つ目の驚きを体験しました。開催会場がとにかく大きく、そして綺麗！さらに会場とホテルが「スカイウォーク」という通路で繋がっているのが、大会期間中雨も降りましたが、濡れずに会場とホテル間の往復が可能という素晴らしい立地でした。この会場で学会を行うのか、とカルチャーショックに近い衝撃を受けたまま、受付で受け取ったプログラムは全328ページと分厚く、ぎっしり並んで書かれたスケジュール表には思わず絶句してしまいました。先輩方の体験記を読み、人が多い・会場が大きい・プログラムが充実、とありましたがまさに、本当にその言葉通りです。ABAIを侮っていました、衝撃的な第一印象です。

24日の夜に Hilton Minneapolis Hotel で行われた International Reception を皮切りに開始した学会は、毎日目紛しい情報に圧倒されメモを取る手が止まりませんでした。大会期間中、常に次の時間は何処の発表を聞きに行こう見に行こう、とプログラムと睨めっこするのは想像以上の充実感です。シンポジウムや研究発表だけでなく「ABAI EXPO」という、行動分析学に関わる様々な団体や企業、大学等が参加するイベントがあるのですがブース数の多さと、ワインやビールを片手にその会場内で談笑する参加者の方々に驚きました。グローバルな大会ですが少しも堅苦しさがなく、イメージしていた「国際学会」とは180度違いました。

また、参加者が大勢押し寄せ会場内に人が溢れることが度々あり、絨毯の上にまるでリビングで寛ぐようなスタイルで講演を聞く方も多く、私も Baum 先生の「A New Paradigm for Behavior Analysis: Allocation,

Induction, and Contingency」というシンポジウムではその一員に加わりました。宿泊先のホテルでは参加証のネームホルダーを掛けた方とすれ違いざまに簡単な挨拶を交わしたり、街にはプログラムを持った人が闊歩していたりと、まさにコンベンションセンター周辺は ABAI 一色と言っても過言ではなかったと思います。

そして何より一番の思い出は、自分の発表を Catania 先生や Malott 先生が聞きに来て下さり、直接実験内容についてのアドバイスを頂き、さらには、Catania 先生と Catania 先生のご友人、小野浩一先生、杉山尚子先生と一緒した昼食も本当に素晴らしい経験でした。ただ残念なことに、緊張し過ぎてどんなお話をしたか、口にしたハンバーガーの味すら覚えていません……。また、ABAI では日本の先生方は勿論、現地で活躍されている多くの研究者の方々ともお話しするチャンスが沢山あり、日本では経験できない研究者としての濃厚な時間を過ごすことができました。

海外での発表に対しては色々な不安がありました。国内とは違った数々の刺激を吸収することができ、また、それによって研究意欲も向上しました。最後になりますが改めて、この度、助成金を頂けたことに心より感謝申し上げます。貴重なこの体験を活かし、今後の研究の発展を目指していきたいと思っております。本当に、有り難うございました。



<機関誌編集委員会からのお知らせ>

英文抄録作成支援ボランティアの紹介について

機関誌編集委員会

行動分析学研究に論文を投稿したいけれど英文抄録の作成に自信がない。受理されるかどうかもわからないうちから英文校閲サービスに高い料金を支払うのもためらわれる…

そんな声に海外で行動分析学を勉強している日本人の方から支援の手が差し伸べられています。

今年度も、英文抄録作成支援ボランティアを募集しました。今年の5月にミネアポリスで行われた ABAI Expo と Local Beer SIG (LBS) にて在米日本人行動分析家にお願したところ、ぜひ協力させて下さいという温かいお申し出を数名の方からいただきました。

英文抄録作成支援を依頼したい会員の方は行動分析学会の「投稿の手びき」と「執筆要項」に即した形式で原稿を用意し、編集事務局 (jjba-edit@bunken.co.jp) までメールでお送り下さい。投稿論文と区別がつくように、英文抄録作成支援の依頼であることを明記して

下さい。

なお、申請資格は以下のとおりです。

- (1) 行動分析学会の学生会員または正会員で、大学などの研究機関に所属していないこと（大学の教員や研究者の正会員には非適用とさせていただきます）。
- (2) 英文抄録を作成後、当該論文を『行動分析学研究』に投稿すること。
- (3) この英文抄録作成支援は、ご自身が勉強されながら、また、行動分析学を学ぶ祖国の仲間との共同作業を経験したいという心意気で協力して下さる無償ボランティアによるものであるということを十分に理解し、最後まで丁寧に気持ち良くやりとりができる方。

皆さまからのご投稿をお待ちしております。

機関誌編集委員会委員長
森山 哲美

<研究教育推進委員会からのお知らせ>

「行動分析学 冬の学校」の開催見送りについて

研究教育推進委員会

今年度の冬に開催を予定しておりました「行動分析学 冬の学校」ですが、予算措置が難しいなどの理由により、残念ながら今年度は見送ることとなりました。

ご参加を考えられていらっしゃる方々には、心よりお詫び申し上げます。ひきつづき開催については努力を重ねてまいりたいと存じますので、講師や内容に関

するご要望・ご意見等下記までお寄せいただければ幸いです。

classbehavioranalysis@gmail.com

研究教育推進委員会委員長

坂上 貴之

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。J-ABA ニュース No. 71 (2013 年夏号) をお届けします。前回編集を担当させて頂いてから、はや1年。時間の経つことの早さを実感しています。

7月26日に創立三十年記念シンポジウムに出席するために名古屋に行きましたが、その途上で、行動分析学会関係のことで名古屋に行くのは、初めて学会発表をした第14回年次大会(17年前)以来であることに気づきました。この学会の歴史の半分以上の期間、自分が会員であったことに驚くとともに(シンポジウムの前に小野浩一が発表されていた、会員の多くが分布する「若い年齢層」に、自分がもはや含まれていな

いことにも驚愕)、この間、学会での活動を通して本当に多くのことを学ばせてもらったことに感謝の念が湧いてきました。このたび功労者表彰を受賞された先生方につきましては申し上げるまでもないことですが、これまで学会を牽引し、後達を育てて来られた先生方には、大変感謝致しております。

10年後、20年後はもっと喜べるように、本学会がますます発展し、会員の方々(私自身も含め)が行動分析家としてさらに成長できることを願っています。

(DS)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトでご公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘 4-698-1

大阪教育大学 大河内研究室 気付

日本行動分析学会ニュースレター編集部

大河内浩人

E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp